



✿ ミャンマーの文化遺産保護にかんする技術的調査

1960年代より軍事独裁政権が続いていたミャンマー(ビルマ)では、特に90年代以降、多くの西側諸国との交流が途絶え、文化遺産の現状についても十分に情報が伝わってこない状況が続きました。しかし、2011年3月の民政移管を契機として、こうした状況が一変し、国内外からの投資や開発の波が一気に押し寄せるようになりました。そうしたなかで、文化遺産についても再び脚光があたりようになりました。

多民族国家であるミャンマーには、有形・無形の多様な文化遺産が存在します。特に、同国中部に位置するバガンは、エーヤワディー(イラワジ)川の岸の平野に数千ともいわれる仏教建造物が点在する幻想的な景観で、世界的にも有名です。しかし、ミャンマーには今現在、ユネスコの世界遺産一覧表に記載された遺産は一つ也没有。つまりこの国の文化遺産は、まだまだ世界に広く知られていないといえます。また、近年の急激な経済発展にとともに、この国の文化遺産を適切に保護するにはどうすべきかを考えることも急務となっています。

そこで奈良文化財研究所は、文化庁による「平成24年度文化遺産保護国際貢献事業(専門家交流)」により、2013年1月26日から2月3日にかけて7名の所員(考古学5名、保存科学2名)をミャンマーに派遣し、同国の文化遺産関係当局者らとの面会・情報交

換、および各地の遺跡・博物館の現地調査(ヤンゴン、ネピドー、バガン、ペイダノー、ピュー、シュリクシェトラ)を実施しました。

実は奈文研では1994～1998年度にかけて「南アジア仏教遺跡保存整備にかんする基礎的調査研究」を通じて、ミャンマーとの共同研究を実施し、人的交流および現地調査をおこなってきた経緯があります。不幸にも政治状況の変化によりその交流は一時途絶えてしまいましたが、例えばこの間に奈文研で研修を受けた専門家が、その後同国で指導的立場に就く等、当時まいた種は確実に根付き、花開いてきました。今回の交流の再開は、まさに「遠い友人との再会」でした。

現地を訪れて感じたことは、文化遺産の理解や哲学について日本と大きく異なる点はあるものの、その違いを尊重することが重要だということです。例えばミャンマーでは歴史的な仏像や仏教寺院であっても、修復してきれいな状態にし、あまつさえ電飾やネオンをつけて装飾したりもします。そうした感覚は日本人とはまったく異なるものですが、何百年も前の文化遺産であっても、彼らにとっては今日でも信仰の対象であり、だからこそ荘厳するのです。つまり彼らにとって遺跡は「生きている遺産」でもあるのです。

こうした違いを尊重しつつ、国際的に承認された基準による文化遺産保護に必要な技術的支援を、奈文研として提供していくことができれば良いと考えています。

(企画調整部 石村 智)



荘厳されたシュエダゴン・パヤー(ヤンゴン・15世紀)



王宮跡とシュエグーチー寺院(バガン・12世紀)